

安全データシート

整理番号 MGC:14-2

【製品名】 窒素

アルゴン＋一酸化炭素の混合ガス（可燃性）

ヘリウム

「可燃性区分 1、急性毒性区分 4」

安全データシート

作成日 1993年3月31日

改定日 2020年9月4日(第9版)

1. 化学品及び会社情報

化学品の名称 : (N₂, Ar, He) +CO (可燃性)
(注意: 名称は容器に表示する製品名と一致させること)

製品コード :

供給者の会社名称 : エア・ウォーター西日本株式会社
住 所 : 大阪市中央区南船場4丁目4番21号
担 当 部 門 : 産業・エネルギー事業部 産業グループ
連 絡 先 : Tel; 06-6252-1761 FAX; 06-6252-1762
E-mail;

緊急連絡電話番号

整 理 番 号 : MGC:14-2

2. 危険有害性の要約

化学品のGHS分類

物理化学的危険性	可燃性ガス	区分1
	高圧ガス	圧縮ガス
健康に対する有害性	急性毒性(吸入:ガス)	区分4
	生殖毒性	区分1A
	特定標的臓器毒性(単回ばく露)	区分1
	特定標的臓器毒性(反復ばく露)	区分2

環境に対する有害性

記載がないものは区分に該当しないまたは分類できない

GHSラベル要素

絵表示又はシンボル



注意喚起語 : 危険

危険有害性情報 : 極めて可燃性の高いガス
: 高圧ガス: 熱すると爆発のおそれ
: 吸入すると有害
: 生殖能または胎児への悪影響のおそれ
: 臓器(吸入: 循環器・神経)の障害
: 長期にわたる、又は反復ばく露による臓器(吸入・心臓、血液)の障害のおそれ

注意書き [安全対策] : 熱、高温のもの、火花、裸火及び他の着火源から遠ざけること。
禁煙。
: 屋外又は換気の良い場所で使用すること
: 粉じん/煙/ガス/ミスト/蒸気/スプレーを吸入しないこと
: 使用前に取扱説明書を入手すること
: 全ての安全注意を読み理解するまで取り扱わないこと
: 保護手袋/保護衣/保護眼鏡/保護面を着用すること
: この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと
: 取扱い後は手をよく洗うこと

- [応急処置] : 漏えい（洩）ガス火災の場合：
漏えいが安全に停止されない限り消火しないこと
漏えいした場合、着火源を除去すること
: 吸入した場合：空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること
: 気分が悪いときは、医師の診察／手当を受けること
: ばく露又はばく露の懸念がある場合：医師の診察／手当を受けること
- [保管] : 施錠して保管すること
: 日光から遮断し、換気の良い場所で保管すること
- [廃棄] : 内容物／容器は勝手に廃棄せず、製造者または販売者に問い合わせること
- GHS分類に関係しない
又はGHSで扱われない
他の危険有害性 : 一酸化炭素を吸入すると、呼吸・心拍数増加、意識障害、昏睡にいたり、重症の場合死亡する
: 高濃度のこの混合ガスを吸入すると、窒息により死亡することがある
: 高圧ガス容器からガスが噴出し目に入れば、目の損傷、あるいは失明のおそれがある

3. 組成及び成分情報

- 化学物質・混合物の区別 : 混合物
化学名又は一般名（化学式） : (窒素(N₂), アルゴン(Ar), ヘリウム(He) + 一酸化炭素(CO))

成分及び含有量:

化学物質	CAS No	分子量	官報公示整理番号		成分濃度(vol%)
			化審法	安衛法	
窒素	7727-37-9	28.01	適用外	適用外	100-(Ar+He+CO)
アルゴン	7440-37-1	39.95	適用外	適用外	100-(N ₂ +He+CO)
ヘリウム	7440-59-7	4.00	適用外	適用外	100-(N ₂ +Ar+CO)
一酸化炭素	630-08-0	28.01	(1)168	公表物質	

4. 応急措置

- 吸入した場合 : 新鮮な空気のある場所に移し、安静、保温に努め、医師に連絡する。
: 呼吸が弱っているときは、加湿した酸素を吸入させる。
: 呼吸が停止している場合には人工呼吸を行う。
- 皮膚に付着した場合 : 大気圧のこの混合ガスにさらされても、特に治療の必要はない。
- 眼に入った場合 : 噴出するガスを受けた場合は、冷却しすぐに医師の診断を受ける。
- 応急措置をする者の保護
に必要な注意事項 : 漏えい又は噴出したガスが空気または酸素と混合し、燃焼、爆発を起こす危険を防ぐため、換気を行い拡散させること。
: この混合ガスが漏えいまたは噴出している場所は、一酸化炭素中毒の可能性および空気中の酸素濃度が低下している可能性があるため、換気を十分に行い、必要に応じて陽圧自給式呼吸器を着用する。

5. 火災時の措置

- 適切な消火剤 : 周辺火災に合わせた消火剤を使用すること。
使ってはならない消火剤 : なし

その他の注意

- : 容器の使用前に、容器の刻印、塗装（容器の表面積の1/2以上ねずみ色）、表示等によりガス名を確かめ、内容物が目的のものと異なるときには使用せずに、販売元に返却すること。
容器には、転落、転倒等を防止する措置を講じ、かつ粗暴な扱いをしないこと。倒れたとき、容器弁の損傷等により、高压のガスが噴出すると、容器がロケットのように飛んで危害を与えることがある。
- : 脱着式の保護キャップは、使用前に取り外すこと。容器を使用しない時は、確実に取り付けること。
- : 容器から直接使用しないで、必ず圧力調整器を使用すること。
- : 圧力調整器の取り付けにあたっては、容器弁のネジ方向を確かめてネジに合ったものを使用すること。
- : 圧力調整器を正しい要領にて取り付けした後、容器弁を開ける前に、圧力調整器の圧力調整ハンドルを反時計方向に回してゆるめ、その後、ゆっくりと容器弁を開く。この作業中は、圧力調整器の側面に立ち、正面や背面に立たないこと。
- : 容器弁の開閉に使用するハンドルは所定の物を使用し、容器弁はゆっくり開閉すること。
- : 容器弁の開閉に際し、ハンマー等でたたいてはならない。手で開閉ができないときは、その旨明示して、販売者に返却すること。
- :
- : この混合ガスを多量に使用する場合には、使用量によって集合装置等の供給設備が特別に設計、製作されることがある。使用者は、これらの設備・機器の正しい操作方法や使用方法について、製造者または販売者から指導を受け、取り扱い説明書および指示事項に従うこと。
- : 容器には、充てん許可を受けた者以外はガスの充てんを行ってはならない。
- : 容器の修理、再塗装、容器弁および安全装置の取り外しや交換等は、容器検査所以外では行わないこと。
- : 容器の刻印、表示等を改変したり、消したり、はがしたりしないこと。
- : 使用後の容器は圧力を0.1 MPa以上残し、確実に容器弁を閉めた後、保護キャップを付けて、速やかに残ガス容器置場に移動させること。
- : 容器の授受に際しては、あらかじめ容器を管理する者を定めること。
- : 契約に示す期間を経過した容器および使用済みの容器は速やかに販売者に返却すること。
- : 高压ガス保安法の定めるところにより取り扱うこと。

局所排気、全体換気

- : この混合ガスを使用するにあたっては、一酸化炭素中毒および空気中の酸素濃度が低くなる危険性があるので、密閉された場所や換気の悪い場所で取り扱わないこと。
- : この混合ガスを使用する設備の安全弁の放出口は、排出された混合ガスが滞留しないように、安全な場所に設置すること。
- : この混合ガスを使用するタンク類の内部での作業は、混合ガスの流入を防ぐとともに十分な換気を行い、労働安全衛生法に従い行うこと。

安全取扱注意事項

- : 可燃性ガスであるので、火気の近くで使用しないこと。
- : 容器弁の口金内部に付着した塵埃類を除去する目的でガスを放出する場合には、口金を人のいない方向に向けて、ガス出口弁を短時間微開して行うこと。
- : 高压のガスが直接人体に吹きつけられると、損傷を起こすことがあ

- るので、高圧で噴出するガスに触れないこと。
- ： 容器をローラーや型代わり等の容器本来の目的以外に使用しないこと。
 - ： この混合ガスを、圧縮空気や空気の代わりに使用しないこと。
 - ： 容器にこの混合ガス以外のガスが入った可能性があるときは、容器記号番号等の詳細を販売者に連絡すること。
- 接触回避**
- 衛生対策**
- 保管**
- 安全な保管条件**
- 適切な技術的対策**
- ： 毒性ガス容器として他の種類のガスと区分し、ガス名が明示された容器置場に、充てん容器および残ガス品に区分して置くこと。
 - ： 容器置場の周囲 2 m 以内には、必要な障壁を設けた場合を除き、火気または引火性もしくは発火性の物を置かないこと。
 - ： 容器置場には、消火設備を設けること。
- 混触禁止物質**
- ： この混合ガスは、可燃性であり、空気、酸素、その他の酸化性ガスと混合すると燃焼・爆発の危険性がある
- 適切な保管条件や避けるべき保管条件注意事項**
- ： 腐食性の雰囲気や、連続した振動にさらされないようにすること。
 - ： 直射日光を受けないようにし、温度 40 °C 以下に保つこと。
 - ： 水はけの良い、換気の良い乾燥した場所に置くこと。
 - ： 火炎やスパークから遠ざけ、火の粉等がかからないようにすること。
 - ： 電気配線やアース線の近くに保管しないこと。
 - ： 常に一酸化炭素濃度を測定し、中毒にならない安全な濃度であることを確認すること。
- 安全な容器包装材料**
- ： 高圧ガス容器として製作された容器であること。

8. ばく露防止及び保護措置

- 許容濃度等** : 日本産業衛生学会(2019年版) : 一酸化炭素 50 ppm
- ACGIH(2019年版) TLV-TWA : 一酸化炭素 25 ppm
- 設備対策** : 屋内で使用又は保管する場合は、換気を良くする措置を施すこと。
- ： 一酸化炭素は毒性が強いので、消費設備でも検知警報器を設置することが望ましい。
 - ： 空気中の酸素濃度が 18 vol%未満にならないようにすること。
- 保護具**
- 呼吸用保護具** : 必要により空気呼吸器、酸素呼吸器、送気マスク
 - 手の保護具** : 革手袋
 - 眼、顔面の保護具** : 保護面、保護眼鏡
 - 皮膚及び身体の保護具** : 特別な保護具はいらない

9. 物理的及び化学的性質

- 物理状態** : 気体
- 色** : 無色
- 臭い** : 無臭
- 融点/凝固点** : 混合物としてのデータがないため、各成分の融点を示す
- 窒素 -209.9 °C
 - アルゴン -189.3 °C
 - ヘリウム -272.2 °C (2.6 MPa)
 - 一酸化炭素 -205.0 °C
- 沸点又は初留点及び沸点範囲** : 混合物としてのデータがないため、各成分の沸点を示す
- 窒素 -195.8 °C

	アルゴン	-185.8 °C	
	ヘリウム	-268.9 °C	
	一酸化炭素	-191.5 °C	
可燃性	:	可燃性	
爆発下限界及び爆発 上限界/可燃限界	:	混合物としてのデータがないため、一酸化炭素の爆発範囲を示す 12.5~74.2 %	
引火点	:	非該当	
自然発火点	:	情報なし	
分解温度	:	情報なし	
pH	:	非該当	
動粘性率	:	非該当	
溶解度	:	混合物の組成で変化するため、各成分の溶解度を示す	
	窒素	1.52 ml/100ml 水	
	アルゴン	3.41 ml/100ml 水	
	ヘリウム	0.87 ml/100ml 水	
	一酸化炭素	2.32 ml/100ml 水	
		(注意: 数値は 20 °Cの水における Bunsen 吸収係数を 100 ml 水に換算した値)	
n-オクタノール/ 水分配係数(log 値)	:	非該当	
蒸気圧	:	非該当	
密度及び/又は相対 密度	:	非該当	
相対ガス密度	:	混合物の組成で変化するため、各成分の相対密度を示す	
	窒素	0.97	
	アルゴン	1.38	
	ヘリウム	0.14	
	一酸化炭素	0.97	(注意: 数値は 0 °C、101.3 kPa、空気=1)
粒子特性	:	非該当	
その他のデータ			
臨界温度	:	混合物の組成で変化するため、各成分の臨界温度を示す。	
	窒素	-146.95 °C	
	アルゴン	-122.45 °C	
	ヘリウム	-267.95 °C	
	一酸化炭素	-140.24 °C	
臨界圧力	:	混合物の組成で変化するため、各成分の臨界圧力を示す。	
	窒素	3.4 MPa	
	アルゴン	4.865 MPa	
	ヘリウム	0.227 MPa	
	一酸化炭素	3.491 MPa	

10. 安定性及び反応性

反応性	:	可燃性の一酸化炭素が含まれているため、酸化性物質の存在や条件によっては反応する
化学的安定性	:	常温・常圧では比較的安定な混合ガスである
危険有害反応可能性	:	なし
避けるべき条件	:	高温の一酸化炭素は、鉄、ニッケルと反応して金属カルボニルを生成し、侵食する。金属を脆化させるので注意すること。
	:	低温、高圧下で水分が存在すると、マンガン鋼、クロムモリブデン鋼等も応力腐食を成長させることがある。
	:	一酸化炭素と酸化剤(酸素、塩素、ふっ素等のハロゲン系ガス、亜酸化窒素等)との反応。

- 混触危険物質** : 酸素、塩素、フッ素等のハロゲン系ガス、亜酸化窒素等
- 危険有害な分解生成物** : 窒素を含む混合ガスをプラズマ切断の作動ガスとして用いると、大気中の酸素と反応して、窒素酸化物 (NO_x) が発生する。
なお、溶接および熱切断時の安全対策については、日本溶接協会編 WES 9009-2:2007「溶接、熱切断及び関連作業における安全衛生 第2部：ヒューム及びガス」を参照すること。

11. 有害性情報

- 急性毒性** : 一酸化炭素の吸入 (気体)
ラット LC₅₀(4H) =1805 ppm、1659 ppm
人 LCL₀(30分) =4000 ppm
- : 一酸化炭素は化学的窒息剤で、生体組織の酸素不足で中毒症状が現れる。
濃度 (ppm) 人体への影響
50 中毒症状の兆候が現れる。
400 2~3 時間内に頭痛と不快感が生じる。
600~700 1 時間以内に激しい頭痛、めまい、吐き気など顕著な障害が現れる。
- : 高濃度の一酸化炭素を吸入すると、警告となる兆候を示さないまま意識を喪失し、死亡する。
- 皮膚腐食性/刺激性** : 一酸化炭素には臭気や刺激作用がないので、中毒症状が現れたら重大なばく露が生じつつあると考えねばならない。
- 眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性** : 情報なし
- 呼吸器感作性又は皮膚感作性** : 情報なし
- 生殖細胞変異原性** : 情報なし
- 発がん性** : 情報なし
- 生殖毒性** : 一酸化炭素は、多くの動物実験で胎児への影響が観察されている。生殖能または胎児への影響の恐れがある。
- 特定標的臓器毒性 (単回ばく露)** : 一酸化炭素は、吸入ばく露で血液中にカルボキシヘモグロビンが増加し、人および動物で神経系、循環器系に影響し、知力、運動能力、聴力なども低下する。
- 特定標的臓器毒性 (反復ばく露)** : 一酸化炭素は、長期間または反復吸入ばく露による心臓、血液の障害の恐れがある。
- 誤えん有害性** : 情報なし
- その他の情報** : 空気と置換することにより単純窒息性のガスとして作用する
- | 酸素濃度 | 症状 |
|------------|---|
| 18 vol% | 酸素濃度安全限界、初期の酸欠症状 |
| 16~12 vol% | 脈拍・呼吸数の増加、精神集中に努力が
細かい作業が困難、頭痛等の症状が起こる |
| 10~6 vol% | 意識不明、中枢神経障害、けいれんを起こす
昏睡状態となり、呼吸が停止し、6~8 分後心臓が停止する |
| 6 vol%以下 | 極限的な低酸素濃度、一回の呼吸で一瞬のうちに失神、
昏睡、呼吸停止、けいれんを起こし約 6 分で死亡する |

12. 環境影響情報

- 生態毒性** : 情報なし
- 残留性・分解性** : 情報なし
- 生態蓄積性** : 情報なし

土壌中の移動性 : 情報なし
オゾン層への有害性 : 情報なし

13. 廃棄上の注意

- : 使用済み容器はそのまま容器所有者に返却すること。
- : 容器に残ったガスは、みだりに放出せず、圧力を残したまま容器弁を閉じ、製造者または販売者に返却すること。
- : この混合ガスを廃棄する場合には、除害装置に導入のうえで排出濃度を許容濃度以下にすること。その際に酸化性ガスとの混触を避けること。
- : 一酸化炭素の毒性に十分注意すること。
- : 容器の廃棄は、容器所有者が行い、使用者が勝手に行わないこと。

14. 輸送上の注意

国連番号 : 1953
※ 単一成分
1066 (窒素)
1006 (アルゴン)
1046 (ヘリウム)
1016 (一酸化炭素)

品名(国連輸送名) : 圧縮ガス
国連分類 : クラス 2.3 (毒性高圧ガス)
容器等級 : 非該当
海洋汚染物質 : 非該当
MARPOL73/78 附属書 II 及び IBC コードによるばら積み輸送される液体物質 : 非該当

国内規制がある場合の規制情報

高圧ガス保安法 : 法第 2 条 (圧縮ガス、毒性ガス)
海上輸送
港則法 : 施行規則第 12 条危険物 (高圧ガス)
船舶安全法 : 危規則第 3 条危険物告示別表 1
航空輸送
航空法 : 施行規則第 194 条
陸上輸送
道路法 : 施行令第 19 条の 13 車両の通行の制限

輸送又は輸送手段に関する特別の安全対策 : 高圧ガス保安法における規定に基づき安全な輸送を行う。
: 移動時の容器温度は 40 °C 以下に保つ。特に夏場はシートを掛け温度上昇の防止に努める。
: 容器に衝撃が加わらないように、注意深く取り扱う。
: 移動中の容器の転倒、バルブの損傷等を防ぐための必要な措置を施すこと。
: 車両等により運搬する場合は、イエローカード、消火設備および応急措置に必要な資材、工具を携行する。
: 酸素ガスと混載するときは、容器弁の方向を反対に向けるか、間隔を十分にとること。

緊急時応急措置指針番号 : 119

15. 適用法令

化学物質排出把握管理促進法 : 非該当

労働安全衛生法	: 特化則第2条第1項第6号(第3類物質;一酸化炭素の含有量が1wt%を超えるものが該当する。) 法第57条の2、施行令第18条の2別表第9(名称等を通知すべき有害物)
毒物及び劇物取締法	: 非該当
高圧ガス保安法	: 法第2条(圧縮ガス、毒性ガス)
港則法	: 施行規則第12条危険物(高圧ガス)
船舶安全法	: 危規則第3条危険物告示別表1
航空法	: 施行規則第194条
道路法	: 施行令第19条の13 車両の通行の制限
大気汚染防止法	: 施行令第10条(特定物質)

16. その他の情報

適用範囲 : この安全データシートは、混合ガス(N₂, Ar, He)+CO(可燃性)に限り適用するものである。

引用文献

- 1) 日本酸素(株)、マチソンガスプロダクツ共編:「ガス安全取扱データブック」、丸善出版(株) (1989年)
- 2) 日本産業ガス協会編:「酸素・窒素・アルゴンの取り扱い方」、日本産業ガス協会 (2000年)
- 3) C. G. A. :「ACCIDENT PREVENTION IN OXYGEN-RICH AND OXYGEN-DEFICIENT ATMOSPHERES」、C. G. A. (1966年)
- 4) 日本化学会編:「化学便覧」、(第3~5版)、丸善出版(株)
- 5) L'AIR LIQUIDE :「GAS ENCYCLOPEDIA」、ELSEVIER SCIENCE PUBLISHERS (1976年)
- 6) ACGIH :「2019 TLVs and BEIs」、(2019年)
- 7) 新日本法規出版(株):「実務労働安全衛生便覧」
- 8) 中央労働災害防止協会編:「新酸素欠乏危険作業主任者テキスト」、中央労働災害防止協会 (2013年)
- 9) 日化協「化学物質法規制検索システム:CD ROM版」(2007年)
- 10) 化学工学会編:「化学工学便覧」改訂7版、丸善出版(株)

- 注) ・ 本 SDS 記載内容のうち、含有量、物理化学的性質等の値は保証値ではありません。
・ 注意事項等は通常的な取り扱いを対象としたもので、特殊な取り扱いの場合はその点を配慮下さい。
・ 危険物有害性情報等は必ずしも十分とは言えないので、本 SDS 以外の資料や情報も十分に確認の上、利用下さい。

混合物の GHS 分類についての解説

この解説は、本体の SDS に記載した物理化学的危険性および健康に対する有害性の GHS 区分について説明するもので、SDS の一部ではない。

本 SDS における混合ガスの可燃性／非可燃性の分類および健康有害性の分類については、各事業者の判断にゆだねるところであり、JIMGA としては区別の考え方を提示するにとどめる。

1. 趣旨 GHS において物質あるいは混合物の物理化学的危険性および健康に対する有害性を分類する際には、試験を行った結果に基づいて行うのが大原則となっている。

混合物の試験結果がない場合、可燃性の危険性については、計算によって求めた値で分類したり、試験を行うか否かのふり分けを行うことができる。混合ガスの可燃性は、ISO 10156:2010「ガスおよびガス混合物—シリンダー放出弁の選択のための着火および酸化能力の決定」に従って、計算により分類することができる。詳細については、詳細については、JISZ7252 2019 版を参照されたい。ここでは、可燃性／非可燃性を判定する計算方法および GHS 分類の可燃性ガスにおける区分についての考え方を解説する。しかし、この計算によって得られた値が、実質的な可燃性／非可燃性を区別する濃度であることを保証するものではない。

健康有害性についても混合物の試験結果がない場合は、計算によって求めた値で分類ができる。ただし、混合物中の個々の成分について、十分なデータがある場合に限られる。混合物中の 1 つの成分でもデータがなければ、混合物はデータが既知の成分だけに基づいて分類されるべきである。

2. 可燃性／非可燃性の判定基準

2.1 公式

$$\sum_i^n (V_i \% / T_{ci})$$

ここで、

$V_i \%$: 可燃性／引火性ガス i の等価含量

T_{ci} : 可燃性／引火性ガス i と窒素との混合物において、 i が空気中で着火しない最大濃度

K_i : 窒素に対する不活性ガスの等価係数

2.2 判定基準

$$\sum_i^n (V_i \% / T_{ci}) > 1$$

2.3 手順

(1) 混合物中の不活性ガスの窒素に対する各等価係数 (K_i) を確認する。

Ar: $K_i=0.55$ 、He: $K_i=0.9$ 、 N_2 : $K_i=1$

(2) 窒素以外の不活性ガスを窒素に換算し、混合ガスの等価体積を計算する。

(3) 全体を 100 % に補正する。

(4) 可燃性ガス成分の T_c 係数を確かめる。

ISO 10156:2010、表 2「可燃性ガスと窒素との混合物において、その混合ガスが空気中で着火しない最大濃度 T_{ci} 」から T_c 係数を求める。

CO: $T_{ci}=15.2 \%$

(5) 判定基準により、可燃性ガスに分類されるか計算する。

2.4 計算例

(1) 以下の混合ガス成分濃度における計算を行う。

$$25 \%(\text{CO}) + 20 \%(\text{Ar}) + 55 \%(\text{N}_2)$$

(2) 不活性ガスの K_i 値を用いて窒素に換算し、混合物の等価体積を計算する。

$$25 \%(\text{CO}) + [20 \% \times 0.55 + 55 \% \times 1.0](\text{N}_2) = 25 \%(\text{CO}) + 66 \%(\text{N}_2) = 91 \%$$

(3) 含量合計を補正して 100 % とする。

$$100/91 \times [25 \%(\text{CO}) + 66 \%(\text{N}_2)] = 27.5 \%(\text{CO}) + 72.5 \%(\text{N}_2)$$

(4) 一酸化炭素の T_{ci} と上記 (3) の V_i % を、判定基準式に代入し、

$$\sum_i^n (V_i \% / T_{ci}) = 27.5 / 15.2 = 1.81$$

1.81 > 1 であり、この混合物は可燃性となる。

2.5 可燃性／非可燃性となる濃度の具体例

(1) 一酸化炭素＋窒素の混合物

15.2 % (CO) 超が可燃性となり、15.2 % (CO) 以下が非可燃性となる。

(2) 一酸化炭素＋アルゴンの混合物

9.0 % (CO) 超が可燃性となり、9.0 % (CO) 以下が非可燃性となる。

(3) 一酸化炭素＋ヘリウムの混合物

13.9 % (CO) 超が可燃性となり、13.9 % (CO) 以下が非可燃性となる。

(4) 一酸化炭素＋窒素＋アルゴン、一酸化炭素＋窒素＋ヘリウム、一酸化炭素＋アルゴン＋ヘリウムの混合物
窒素、アルゴン、ヘリウムの K_i が異なるため、各成分の等価含量から判定基準式で計算しなければ、可燃性と非可燃性を区分する濃度は算出されない。

2.6 GHS 区分について 標準気圧 101.3 kPa および 20 °C において、この混合ガスを空気と混合した場合に、混合ガスが 13 % (容積) 以下で爆発範囲 (燃焼範囲) を有する場合、または、爆発 (燃焼) 下限値に関係なく、空気中での爆発範囲 (燃焼範囲) が 12 % 以上の幅を有する場合は、区分 1 となる。

3. 健康有害性の区分

3.1 急性毒性

3.1.1 一酸化炭素濃度が 10% 以下の場合

一酸化炭素は、ラット $LC_{50}(4H) = 1805$ ppm、1659 ppm のデータから区分 3 に分類されている。混合物の ATE_{mix} (acute toxicity estimate) 値 (急性毒性推定値) は、以下の式で表される。

ここで、ATE_{co} は CO の $LC_{50}(4H) = 1659$ ppm とし、 C_{co} は混合物中の CO 濃度 (vol%) である。

$$ATE_{mix} = ATE_{co} \times 100 / C_{co}$$

急性毒性の GHS 分類が区分 4 では、 $2500 \text{ ppm} < ATE_{mix} \leq 20000 \text{ ppm}$ である。従って、上記式から算出される C_{co} の範囲は、 $8.3 \% \leq C_{co} < 66.4 \%$ となる。CO 濃度がこの範囲においては、区分 4 に分類されよう。また、CO 濃度が 66.4 % 以上の場合には区分 3 に分類されるであろう。

3.1.2 急性毒性のラベル要素

本体の SDS では、急性毒性は区分 4 としている。上記により、区分 3 と分類した場合、MGC:14-1 の SDS を使用すること。

3.2 生殖毒性

一酸化炭素の生殖毒性は、区分 1A に分類される。その他の成分については、データ不足で分類できない。

この場合、一酸化炭素のカットオフ値／濃度限界を使用して分類する。

一酸化炭素の等価含量が、0.1 %未満の場合には区分外となる。0.1 %以上の場合には、区分 1A と分類されよう。ただし、等価含量が 0.1 %以上 0.3 %未満の場合には、本体の SDS に情報を記載する必要はあるが、ラベルへの警告表示は任意となろう。0.3 %以上の場合には、SDS とラベル表示の両方に記載することになろう。

本体の SDS では、一酸化炭素の等価含量が 0.3 %以上として記載したものである。

3.3 特定標的臓器毒性（単回ばく露／反復ばく露）

一酸化炭素の特定標的臓器毒性（単回ばく露）は区分 1 に、特定標的臓器毒性（反復ばく露）は区分 2 に分類されている。生殖毒性の場合と同様に、一酸化炭素のカットオフ値／濃度限界を使用して分類する。

下表 4 に、カットオフ値／濃度限界を示した。表 4 から分かるように、一酸化炭素の等価含量が 1.0 %未満の場合、特定標的臓器毒性（単回ばく露／反復ばく露）は区分外となる。1.0 %以上の場合、特定標的臓器毒性（単回ばく露）は区分 1 に、特定標的臓器毒性（反復ばく露）は区分 2 に分類されよう。ただし、等価含量が 1.0 %以上 10 %未満の場合には、本体の SDS に情報を記載する必要はあるが、ラベルへの警告表示は任意となろう。10 %以上の場合には、SDS とラベル表示の両方に記載することになろう。

本体の SDS では、一酸化炭素の等価含量が 10 %以上として記載したものである。

表 4

CO の分類		混合物の判定基準となる CO のカットオフ値／濃度 限界	
特定標的臓器 毒性	区分	区分 1	区分 2
単回ばく露	1	$\geq 1.0 \%$ $\geq 10 \%$	/
反復ばく露	2	/	

4. 危険物輸送に関する国連分類における高圧ガス 国連危険物輸送勧告では高圧ガスは下記のように分類されている。GHS 分類で可燃性ガスが区分 1 に分類され、急性毒性（吸入：ガス）が区分 1～4 に分類されるものは、国連分類における引火性・毒性ガスに分類されクラス 2.3 に該当し、国連番号は 1953（その他の圧縮ガス（毒性かつ引火性のもの））となる。 GHS 分類で可燃性ガスが区分 2 に分類され、急性毒性（吸入：ガス）が区分 1～4 に分類されるものは、国連分類における毒性ガスに分類されクラス 2.3 に該当し、国連番号は 1955（その他の圧縮ガス（毒性のもの））となる。

分類	定義
クラス 2 高圧ガス	高圧ガスとは、50℃で圧力 300kPa を超える蒸気圧を持つ物質、または 20℃で圧力 101.3kPa で完全に気体となる物質で、次に掲げるものをいう。
クラス 2.1 引火性ガス	引火性ガスとは、20℃で圧力 101.3kPa において、空気と混合した場合の爆発限界の下限が 13%以下のもの、または爆発限界の上限と下限の差が 12%以上のガスをいう。
クラス 2.2 非引火性・非毒性ガス	非引火性・非毒性ガスとは、液化ガスまたは 20℃で圧力 280kPa 以上となる引火性ガスまたは毒性ガス以外のガス。
クラス 2.3 毒性ガス	毒性ガスとは人が吸入した場合に強い毒作用又は腐食作用を受けるガス（ $LC_{50} \leq 5000 \text{ ml/m}^3$ ）。

5. 高圧ガス保安法

5.1 可燃性ガス

高圧ガス保安法における可燃性ガスの定義は、一般高圧ガス保安規則第 2 条第 1 号イおよびロに記載が

ある。

(イ) 爆発限界（空気と混合した場合の爆発限界をいう。以下同じ。）の下限が 10 %以下のもの。

(ロ) 爆発限界の上限と下限の差が 20 %以上のもの。

この条件を満たす混合ガスは、高圧ガス保安法の可燃性ガスとなるので注意を要する。

5.2 毒性ガス

高圧ガス保安法における毒性ガスの定義は、一般高圧ガス保安規則第 2 条第 2 号に記載されているガスに加え、毒物及び劇物取締法第 2 条第 1 項で規定する毒物の内、ガス(吸入)で評価された毒物で法第 2 条の定義による高圧ガスをいう。

上記毒性ガスとの混合ガスについては、吸入した場合の急性毒性(LC₅₀)が 500 ppm(4 時間)以下のもの及び高圧ガス保安法に掲名されている毒性ガスを 50 %以上含んだ高圧ガスとする。

一酸化炭素は毒性ガスであり、混合ガスの急性毒性の計算方法は次の計算式で算出する。

$$P = 100 / (n_1 / P_1 + n_2 / P_2 + \dots + n_i / P_i)$$

P (ppm) : 混合ガスの急性吸入毒性の値。

P_i (ppm) : i 成分の急性吸入毒性(LC₅₀)の値。ただし、毒性の値を持たない物質の場合は無限大とする。

n_i (%) : 混合ガス中の i 成分の濃度。

(注) LC₅₀の値が 1 時間値しか得られない場合には、「国際連合化学品の分類及び表示に関する世界調和システム(GHS)」第 3.1 章「急性毒性」の注意書きに基づき、1 時間での数値を 2 で割った値を 4 時間に相当する数値とする。